

『聖淫愛華』

著：西野 花

ill：石田恵美

「『女神の蜜華』というものについて知りたい」

そう言った時、店主の片眉がぴくりと動く。

「なんだって？」

「『女神の蜜華』だ。媚薬と聞いた」

その瞬間、ユエルは背中に剣呑な視線を感じた。背後の席から客が何人か立ち上がる気配がする。反射的に剣の柄に手をかけた。

「なあ、兄ちゃん」

「そんなこと聞いてどうするんだ」

「別に。単なる興味だ」

背後で店主との会話を聞いていたらしい客の男達がユエルに絡んでくる。振り返らずに答えながらユエルは考えた。

ここで騒ぎを起こすのはよくないだろうか。少なくとも、斬って捨てるのはまずいような気がする。そもそもユエルは聖騎士で、戦場で戦うのと城の防衛が役目だ。こんな潜入任務でどう振る舞えばいいかなどという訓練は受けていない。

ユエルはため息をつき、柄にかけた手を鞘に移動させた。

「いやいやそんなことねえだろう。何が目的だ」

「あれはな。気持ちよーくなれる薬なんだぜ。なんだい兄ちゃん興味あるのか？ そんなもんに頼らなくとも、俺が気持ちよくしてやろうか」

客の男の手がユエルの肩にかかった。嫌悪感にぞわりと肌が粟立つ。

「離せ」

「ああ？」

「離せと言っている。触るな」

ユエルはむやみに他人に触れられるのが好きではない。ましてや、こんな品のない男達になど。

「そんなに冷たいこと言わなくてもいいじゃねえか。アレを探してるってことは、興味あるんだろ」

男の手がユエルの肩から背中へ降り、腰を撫でようとする。その瞬間、ユエルは振り向きざま鞘に収めたままの剣で男の顎を殴り飛ばした。反射的に身体が動いてしまった。

「ぎゃっ！」

横っ面を強かに殴打された男は奇妙な声を上げて床に吹っ飛んでいく。それを見た他の男達にわかにいきり立った。

「てんめえ…！」

「優しくしてりゃつけあがりやがって」

ガタガタと椅子から立ち上がった男達がユエルに迫っていく。仕方なく応戦しようとしたユエルだったが、その時、後ろからふいにマントを引かれた。

「————こっちに来な」

若い男の声だった。その響きにはこちらに危害を加えようという意思は感じられない。思わず振り向こうとすると、ぐい、と腕を掴まれた。

「こっち！」

ユエルは若い男に引っ張られるままに店を出て通りを駆ける。人目を避けてすぐに路地に入り、目の前を先ほどの男達が何か喚きながら走りすぎていった。

「————とりあえず撒けたんじゃね」

ユエルはそこで初めて彼を見た。おそらくは二十代だと思う。自分より少し年上かもしれないが、童顔に見える。丈の短い上着とやはり腰までの短いマントを羽織っていて、動きやすさを重視しているように見えた。剣を帯びているのがちらりと確認できた。

あちこちに跳ねた金髪と、明るい緑色の瞳にはどこか茶目っ気が感じられた。だがその場慣れしたような雰囲気は、彼が決して明るいだけの青年ではないことを物語っている。

「つかさ、俺びっくりしちゃった。いきなりあんなとこであんなこと聞く奴がいるのかって」

彼は呆れたように肩を竦めた。

「いけなかったのか？」

「『女神の蜜華』はお上に目をつけられてるからな。扱いには慎重になってんだよ」

「そうだったのか」

ユエルは自分が下手を打ったことを自覚した。

「それは知らなかった。面倒をかけたな。礼を言う」

「……あなた、この街初めてだろ。見るからに慣れてなさそうだから。ひょっとして、お上の人？」

「違う」

ユエルは嘯く。彼はそんなユエルを疑わしそうに見つめていた。だがすぐに「ま、いいや」と呟き、通りの奥を覗き込む。

「あいつらもういねえみたいだから、行こうぜ」

「……え？」

彼は当然のようにそう言った。ユエルが首を傾げていると、はあ、と大仰にため息をついてみせる。

「あなたみたいなのがふらふらしてると、また騒ぎ起こされそうだからな。とりあえず俺んとこ来いよ。俺の雇い主なら面倒見てくれると思うから」

「それは有り難い」

こんな街でも手助けしようとしてくれる者はいるものだ。ユエルはそう思ったが、後になってから自分のその世間知らずさを死ぬほど恨むことになるのだった。

「俺はチェイス。あんたは？」

「……ルイズ」

ユエルは偽名を名乗る。身分を隠して来ている以上は当然のことだった。任務とはいえ、イシユタニア家のものがアスモデウスに足を踏み入れたとあっては外聞が悪い。少なくとも両親ならばそう言うだろう。

「ふーん」

チェイスは先に立って街の奥に進んでいく。その先には大きな建物があつた。それはこの街で見た建物の中で一番大きかつた。正面の入り口とおぼしきところから引切りなしに人が出入りしている。

「こっち」

チェイスは建物の正面ではなく横に回り、裏口のようなところから入つていった。そこは表とは違い人気がない。離れたところから聞こえる喧噪と音楽を耳にしながらか彼の後をついていった。階段を三階分昇り、ドアをふたつ開ける。

「旦那。ちょっといいか」

チェイスがそう言つて開けたドアの中は、どこか殺風景な、それでいて雑多な部屋だつた。つまり絵画や花などの装飾品がなく、一方で本棚や物入れが無造作に床に置かれている。

その部屋の奥の大きな机の前に一人の男が座つていた。行儀悪く足を机の上に投げ出し、何やら書類に目を通している。

「あん？」

男が顔を上げる。年の頃は三十代の前半といつたところか。少し癖のある茶色の髪を無造作に括り、短く整えた顎髭を生やしてつた。パリツとした上着を着てつて、身なりと顔立ちは整つてつるのに、皮肉げな表情がそれを隠している。灰色の瞳が一瞬鋭くユエルを一瞥した。

「迷子拾つて来たぜ。なんか探し物があるんだと」

「迷子だと？」

男が胡乱げにユエルを見た。その視線が頭からつま先まで舐めるように這つていくのに、思わづ背筋がぞくりとする。

「とりあえず顔を見せてもらおうか」

ユエルは一步前に出ると、無言でフードを下ろした。

「おお？」

男とチェイスが食い入るようにユエルを見る。

「こいつはまた、上玉連れてきてくれたのか？ チェイス」

「やめとけよ。この御仁にそういう冗談は通じねえっぼいぜ」

「冗談でもないんだけどなあ……。うちの娼館の最高ランク狙えると思うぜ？」

どうやらここで働く側だと思われていることに、ユエルは思わず不快感を覚える。それが顔に出ていたのか、目の前の男に笑われてしまった。

「おいおい、なんかえらい毛色の違うのが来たなあ」

「だろ？　なんか酒場でいきなり『女神の蜜華』について聞きたいとか言い出すからびびったぜ」

「へえ。そいつはまた」

「——事情があって、その『女神の蜜華』について調べている。あなた方が何か知っていれば、ぜひ教えていただきたいのだが。もちろん相応の礼はする」

「……何でそんなことを？」

ユエルは予め用意していた答えを口にした。

「俺はさる貴族に仕えている者で、主人の無聊を慰めるためにその薬を入手する役目を仰せつかった」

「その貴族の名は？」

「悪いが明かせない」

「ま、そうか」

男はそれで納得したようだった。机に載せた足を下ろし立ち上がる。

「ついてきな」

男は部屋を出た。ユエルはその後をついて行き、チェイスがそれに続く。

「あんた名前は？」

「ルイズだ」

「そうか。俺はイアソンだ。よろしくな」

イアソンと名乗った男はユエル達が来た方向とは反対側の廊下を抜け、扉の先の渡り廊下のよな通路を通った。下は吹き抜けになっていて、階下から賑わいが聞こえてくる。

「この建物は『フレイヤの涙』っていったな、娼館、酒場、遊技場がひとつになっている」

「あなた方はここの従業員なのか？」

「まあ、そうだな。ここは俺の館だ。そっちのチェイスは用心棒兼雑用係」

イアソンはこの建物の支配人だと言った。

多くの人間が集まるだろうこの館なら、あるいはリュカ王子の行方もわかるやもしれない。

渡り廊下を抜けて向かいの棟に渡る。そちらはどうやら彼らの住居エリアらしかった。ドアを開けると、今度は幾分か生活感のある空間になる。

「まあ座ってくれ。今飲み物でも出そう」

「構わなくていい」

「『女神の蜜華』についてはこの界限でもトップシークレット扱いなんだ。ある程度腹を割って話した後じゃないと教えられん」

「……」

ユエルは仕方なく、促されるままにソファに座った。ほどなくしてゴブレットが目の前に置かれる。中は葡萄色の液体で満たされていた。

「そこそこ上等の酒だ。口に合わないことはないと思うが？」

「……酒はあまり嗜まない」

ユエルは小さく息を吐くと、ゴブレットを持ち上げる。イアソンは手にしたそれを目の上に掲げ、乾杯、と告げた。チェイスもそれに倣う。彼らが自分の口にそれを運んだのを見て、ユエルもまた酒を口にした。甘い豊潤な香りが鼻腔に広がる。濃厚な口当たりだが、意外と飲みやすかった。

ユエルが最後の一滴まで飲み干すのをイアソンとチェイスはじっと見ている。

「なかなかいい飲みっぷりだ」

「……っ」

身体がじんわりと熱くなる。口当たりのいい酒ほど酔いが回ると聞いたことがあった。自分は大事な任務で来ているのだから、酔っ払っている場合ではない。しゃんとしなければ。

「『女神の蜜華』はどこで手に入るんだ」

「ここで手に入るぜ」

イアソンは言った。

「何だと？」

「ここには娼館もある。当然の話さ」

「では、それはどこから入ってきた？」

「それを教える前に、俺の質問に答えてもらいたいんだがね。聖騎士様」

「——」

ユエルは息を呑んだ。その瞬間心臓が凍りつきそうになった。

「な——」

どうしてそれを。言葉を失うユエルに、イアソンはやれやれと肩を竦めて告げる。

「あんたの剣の柄の宝玉。それは聖騎士だけに授与されるものだ」

ユエルは思わず剣の柄に手をやる。だがその時、自分の身体に起きた異変に気づいた。

(手が、痺れて——力が、入らない……?)

それは手だけではなかった。足にも同様の感覚が生じている。そして身体の中心に何か熱いものが生まれていた。

「酒に、何か入れたな……!？」

「さすがに気づいたか。それがあんたの知りたがっていたものそのものだよ」

「経口でもけっこう効くもんだなあ」

「逆に口から飲むと手足の自由を奪えるのさ。だからこういう時に使える」

感心したように呟くチェイスに、イアソンがのんびりとした口調で説明した。彼らのまるで緊迫感のない様子にユエルは思わず奥歯を噛みしめる。そしてイアソンがゆっくりと立ち上がった

た。

「さて聖騎士様。いったいどんな目的でここに来たのか、何故『女神の蜜華』のことを探っているのか、話してもらおうか。どうせさっき名乗った名前も偽名なんだろう？」

「っ……！」

どうにかして逃げなければ。ユエルは必死になって身体を起こし、立ち上がろうとする。

「おっ、がんばるじゃん」

椅子に座ったままのチェイスが面白そうに言う。ユエルは剣を抜こうとしたが、手が震えて力が入らない。

「無駄だって。あんたみたいなお堅そうな奴には特に効く。何せ清らかな処女が自分から男の上に馬乗りになって腰を振るほどだからな」

イアソンの言葉はユエルにとって恐ろしいものばかりだった。そんなものが自分に使われている？ それではこの先どうなってしまうのだろう。媚薬の作用は次第に高まってきて、肌の表面がぴりぴりと敏感になってきていた。呼吸も乱れ、体内の熱もじわじわと広がっている。

「こんな、モノを俺に使うってどうするつもりだっ……！」

「どうするって？」

イアソンはユエルの顎に手をかけて上を向かせた。雄の色を宿した目に貫かれ、背筋がわななく。

「お綺麗な騎士様。きっと女を抱いたこともないだろう。俺達がこの街にふさわしい扱いをしてやるよ」

「イアソン、そいつ絶対才能あるぜ」

「知ってるさ。俺を誰だと思ってるんだ」

「ああ、失礼した。イアソン・ウィード。このアスモデウスの顔役だもんな」

顔役。ということは、彼がこの街を取り仕切っているということか。

「チェイス。彼をベッドまでお連れしろ」

「了解」

チェイスは立ち上がるとユエルを軽々と抱え上げた。

「は、離せ！」

「はいはい暴れな—い」

彼は隣の部屋のドアを足で蹴って開ける。そこには大きなベッドがあり、ユエルはその上に放り投げられた。

「ある程度お前が進めていいぞ。破瓜は俺がやろう」

「ちえ。おいしいとこ持っていきやがる。……まあいっか」

衣服の前が開けられる。肌を露わにされ、本当に犯されるのだという恐怖に襲われた。必死でもがくが、やはり力は入らない。それどころかどんどん脱力感がひどくなっていった。

「嫌、嫌だ、やめろ……っ！」

ユエルは決して弱々しい存在ではない。聖騎士としても誰にもひけをとらず、数々の武功も上

げてきた。ユエルよりも腕の立つものなど数人しかいない。

それなのに今、媚薬に力を奪われ、男に組み伏せられている。

———こんな目に遭わされるなんて。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>